慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	構築主義批判・以後
Sub Title	
Author	浜, 日出夫(Hama, Hideo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2008
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.13 (2008.) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 構築主義批判・以後
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

構築主義批判・以後

2007年度大会シンポジウム企画担当　浜　日出夫

個人的な経験から話をはじめることをお許しいただきたい。慶應義塾大学で担当している知識社会学の講義では、毎年、博物館におけるモノを集める・並べる、それを見るといった活動と相関して歴史が構築されているという話をしている。はじめはそれなりに手ごたえも感じたが、しだいに学生たちの反応が鈍くなってきたように感じていた。そこで数年前知っている学生に聞いてみたところ、「そういう話ってよく聞くじゃないですか」という返事であった。どこの講義でも、ジェンダーやセクシュアリティ、エスニシティ、社会問題、感情などが社会的に構築されるという話を聞かされていて、「どうだ、知らなかっただろう」と得意げなのは教員ばかりで、聞かされる学生のほうは「またか」と食傷気味ということのようであった。

そして、北田暁大さんの「構築されざるものの権利をめぐって」（上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、2001 年）や浅野智彦さんの『自己への物語論的接近』（勁草書房、2001 年）が出て、「構築されざるもの」「語りえないもの」に着目する構築主義批判が登場してきたのもちょうどそのころであった。

それから数年がたって、現在では、一方で構築主義的な認識が、少なくとも社会学を専攻する学生あたりまではうすく常識化して広がっており、他方で構築主義批判のほうもいわば「発展学習」として教えられ、大学院生レベルではこちらも常識化して、両者が拮抗し膠着している状態であるように思われる。

2007年度大会シンポジウムで「構築主義批判・以後」を企画したのはこのような状況認識からであった。以下は幹事会に提出し、あらかじめ報告者・討論者のみなさんにもお送りした企画趣旨の文章である。どのような依頼をして報告者のみなさんが報告を考えてくださったのかを書いておくほうがフェアであろうと思うので再録しておく。

「90年代に入ってから、社会問題・感情・ジェンダー・セクシュアリティ・エスニシティ・歴史などを社会的に構築されたものとしてとらえる構築主義がめざましい成果を挙げてきた。これに対して90年代末ころから「構築されざるもの」「語りえないもの」を強調する構築主義批判がはなばなしく登場して、現在は両者が拮抗し膠着している状態であると思われる。このシンポジウムではこの膠着状態からの出口をさぐることをねらいとする。報告者は次の３名の方である。

鈴木智之氏（法政大学）は、フランクの『傷ついた物語の語り手』の翻訳を通して構築主義批判の流れに棹さしてこられたおひとりである。

岡原正幸氏（慶應義塾大学）は、以前は感情の構築主義の立場でお仕事をしてこられ、現在は（戦略的）本質主義の立場に転じられたようにみえる。

野口裕二氏（東京学芸大学）は、構築主義を推進する立場で研究を続けてこられ、構築主義の内部で構築主義批判を乗り越えようとしておられる。

構築主義批判をめぐって三様の対応をしてこられた３名の報告者の方にそれぞれのお仕事を振り返っていただくとともに、今後を展望していただくことを通して、全体として「構築主義批判・以後」を展望したい。

討論者は、構築主義と親和的なウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジー（論理文法分析）の立場で仕事をしてこられた浦野茂氏と、暴力や感情に照準しつつ、自ら構築主義批判・以後を模索してこられた奥村隆氏にお願いしている。」

企画趣旨には書いていないが、３人の報告者の方については、それぞれ構築主義世代、構築主義批判世代、間に挟まれた世代の代表という位置づけを頭のなかで描いていた。というのも、構築主義と構築主義批判の関係は世代間闘争という側面を持っているのではないかという感触を持っていたからである。野口裕二さんは私とほぼ同世代であり、実証主義者であった自分たちの先生の世代に対して構築主義を選択した世代であった。私たちと鈴木智之さんとは 10 歳ほどしか離れていないが、企画趣旨にも述べたようにこの 10 年間の社会学理論をめぐる状況の変化は急であった。岡原正幸さんはちょうど間に挟まれた世代である。

この特集には、３人の報告者だけではなく、おふたりの討論者からも論文を寄せていただいた。シンポジウム当日は悪天候にもかかわらず、三田社会学会としては異例と言ってよい 80 名ほどの方が参加してくださった。フロアも交えて議論は熱を帯びた。学会のシンポジウムを企画したり参加したりして、「うまくいった」「おもしろかった」と思うことはめったにないが、このシンポジウムはこの点でも異例であった。おそらく「構築主義批判・以後」というテーマが今日多くの人にとってアクチュアルなものと感じられているからだろう。構築主義と構築主義批判とは今日強い磁場を形成していて、とりたててこのような話題に関心を持たない人をも捕らえて、ある磁力を帯びさせてしまう力を持っている。３人の報告者の方はこの磁場のなかで今日社会学者として取りうる（大げさに言えば）身の処し方をくっきりした対照を描きつつ鮮やかに示してくださった。各報告の内容については、奥村隆さんが見事に要約してくださっているのでくりかえさない。浦野茂さんが「構築主義批判・以後」という問題設定そのものに対して示されたアイロニーも含めて、このシンポジウムは「構築主義批判・以後」の現在を示しえたのではないかと企画担当者として自負している。報告者と討論者、参加者のみなさんにお礼を申し上げたい。この特集が当日の会場の熱をすこしでも伝えることができていれば幸いである。

（はま　ひでお　慶應義塾大学文学部）